

イメージしてください。

こどもたちは、どんな目線で世界を見ているのでしょうか。

お母さまお父さま、ピアノや絵筆と同じように、

お子さまに「カメラ」を持たせてみてください。



撮影：高橋優輔くん(8歳)

多摩美術大学助教授の澤田泰廣さんは、こう語っています。「幼児にカメラを与えて、好きに撮っていいよというのと、とてもユニークな視点で面白い発見をします。興味をもったものを瞬間的にとらえるカメラの特性は、じつは美術教育の出発点としても有効ではないかと考えます」それは、どうしてですか？「いわゆるお絵描きなど美術の入口から、こどもたちは上手な絵を学んでしまう場合があります。それはおとなの価値観で、創造性とは別のものです。美術の基本はもっと広く自由にとらえられていいと思う。いろいろな手段で表現する楽しさ、ということです」そこから、将来の芸術家やデザイナーが生まれる？「それもおとなの発想でしょう(笑)。その体験を通じて、身近な生物や建築に関心を深める子もいるでしょうし」

もうすぐ、こどもの日。気候も暖かく、お散歩にはもってこいの季節です。澤田さんの言われるように、こどもに「はじめての写真」体験は、いろいろな興味への入口になりそうです。こどもがこどもの目で写真を撮るって、ひとつの情操教育や科学教育といえる、のかもしれない。誕生から入園式へとつづく成長のアルバムに、お子さま自身が撮った「はじめての写真」を加えてはいかがでしょう。「写ルンです」や押すだけの小型カメラなら取扱いも簡単で、こどもの感じたままを「映像にする」ことができます。情報の時代は、ますます映像を扱う時代にもなります。それが、こどもたちの育ってゆく、これからの時代。まずは、お子さまの「はじめてのフジカラー」。そこからはじまる長いお付き合いを、どうぞよろしく。

国境やことばを越えたコミュニケーション。それが、image。私たちは過去に例のない質と量と速度の「imageの世紀」を、すでに迎えています。光学、化学、電子工学から認知科学の領域まで。フジフィルムは「imageを科学する」世界的フロンティアとして、これからも進みます。

6

VOL.

はじめてのフジカラー

FUJIFILM

I&I-Imaging & Information

www.fujifilm.co.jp

imageする会社。FUJIFILM